

木下 史青

Kinoshita Shisei [展示デザイナー/東京国立博物館 学芸企画部 上席研究員]

価値観・世界観を
空間全体で見せるミュージアム

博物館のルーツは 文明開化の博覧会

— 美術館と博物館は何が違うのでしょうか。

英語で博物館はMuseumとされ、美術館はArt museumまたはArt galleryとされています。すなわち、美術館は美術の博物館だといえるでしょう。西洋ではミュージアムとは学問の拠点としての施設と捉えられています。たとえば大英博物館には、大英帝国が七つの海を越え、まだ知られていなかった世界を発見し、そこで得たモノを持ち帰って来た収集品が膨大に蓄積されています。モノを集めることに對する執念を燃やし、全世界から珍しいモノや動物を集めて来て、学問として体系づけたのが博物館です。こうして、大英博物館が一般公開されたのは1759年とされています。

日本では長い鎖国を終えた明治の文明開化によって、すべてが始まりました。1872(明治5)年に湯島聖堂大成殿を会場として文部省博物館による日本初の展覧会が開かれました。ここでは、文化財や剥製、標本などが展示されたのですが、どちらかというと見世物小屋的なものだったようです。実はこれが東京国立博物館のルーツです。この1872年3月10日が東京国立博物館の創立日とされていて、2022年に創立150周年を迎えようとしています。

東京国立博物館には法隆寺宝物館がありますが、奈良県斑鳩の法隆寺の宝物がここにある理由は、1868年の明治政府による神仏分離令が背景にあります。これにより、全国で廃仏毀釈という寺院・仏像の破壊が始まりました。そこで経済的に困った寺院が宝物を皇室に献上しました。その後それが東京国立博物館の管理になったという経緯があります。

また、美術品に関しても明治を迎えるまで日本には美術という概念そのものがなく、「美術」という言葉も明治時代始めにつくられたものです。明治政府は、美術を新しい日本に根付かせ美術を担う人材育成のために東京美術学校を創立し、日本にも世界に誇る彫刻があるということで、そこに仏像造りをしていた高村光雲を教授として招きました。そして、人びとにまだ親しまれていなかった美術を、観て楽しんでもらうために建設したのが美術館でした。

CONTENTS

特集：地域に輝きを加えるミュージアム

SPECIAL INTERVIEW 木下史青 氏	1
-----------------------------	---

SPECIAL EDITION	
東京国立博物館 平成館	5
福岡市美術館	7
北海道立三岸好太郎美術館	11
神奈川県立近代美術館 鎌倉別館	13
彫刻の森 ピカソ館	15
刀剣博物館	17
神戸市立博物館	19

くらしは文化 国立民族学博物館	21
--------------------	----

*本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。
表紙写真：福岡市美術館

環境造形デザインの視点でミュージアム空間を捉える

— どうして博物館に関わられるようになったのですか。

東京藝術大学三年生の時に専攻した環境造形デザインは、クルマや電気製品などの工業製品やイラストレーションのような作品だけをデザインするのではなく、それを取り巻く空間・環境全体を考えるデザインでした。そこでは、都市・建築・庭園・インテリア・家具のデザインがヒトとどのような関係性を持っているかという「ヒト・モノ・バ」への視点を身に付けることが重視され、流行にあわせて膨大な量を造り、消費し尽くしてきたこれまでのデザインへの反省がありました。このデザインの考え方と博物館への興味が初めて結びついたのが、ミュンヘンのグリュプトテーク（古代彫刻陳列館）を訪れた時でした。展示空間に足を踏み入れた途端に、空間全体から体全体を揺さぶるような衝撃を受け、見たこともない「展示空間の質の高さ」を体験しました。ギリシャ神殿の彫刻は自然光のもとにあり、時間によって影も変化します。そこでは、光の秩序を受けながら変化する古代彫刻を展示していました。素晴らしい作品の価値観や世界観を空間全体で見せるグリュプトテークに立ち、このような展示デザインを自分でやってみたいと思ったのです。

総合文化展である平常展を楽しく見せる展示デザイン

— 展示デザイナーとはどのような仕事なのでしょう。

展示室の作品配置や照明、展示ケースのデザインをはじめとして、展示にまつわる全体をプロデュースしています。かつて、展示のすべては学芸員（キュレーター）の仕事でしたが、キュレーターは収集された資料の研究を行うべきということで、モノの魅力をお客様に正しく伝えるために展示デザイナーが設けられました。さらに展示デザイナーに加え、教育普及を担当するエデュケーションスタッフ、収蔵庫の管理を行う担当部署が協力して進めています。よく「美術館にいくといつも混んでいる」という声を聞きますが、それは博覧会としての「特別展」が混んでいるからです。僕も2009年までは特別展のデザインを手がけていたのですが、当時は1日に1万人、2万人のお客様をお迎えして、2〜3時間並ぶこともありました。特別展の原点を博覧会と考えれば、混雑してはいるものの、そこでは各地に足を伸ばさなくても、一カ所でその世界をまとめて見ることができます。また、海外の博物館やコレクションから一つのテーマで集められた特別展もあるかもしれません。特別展は、さまざまな世界観や価値観がまとめて見られる福袋のようなお得な展覧会だとも言えます。一方、総合文化展（平常展）の来館者は日に千人台ということも珍しくはありません。そこで、東京国立博物館では平常展をもっと活性化しようと、2004年に本館日本美術の展示をがらりと変えました。現在、僕が力を注いでいるのは総合文化展をより楽しく、よく見せるということです。その延長として、「博物館に初もうで」や「博物館でお花見を」

など、総合的に日本文化を伝える企画も展開しています。総合文化展は平常展といっても、いつも同じものが展示されている訳ではありません。たとえば日本では、床の間に季節に合わせた掛け軸を掛け、それに合わせて屏風を出していました。それが日本美術の「古くからの楽しみ方」なのだと思います。西洋彫刻のように絶対的な価値を見せるのではなく、季節の変化を楽しんでいただく。そういう意味では、日本の博物館が展示替えをするのは当たり前のです。東京国立博物館の総合文化展では、浮世絵版画は2週間ごと、絵画は4週間ごとに展示替えをしています。絵画、彫刻、染織品、工芸品などの展示室では、ほぼ毎週どこかで展示替えが行われています。

「展示」と「保存」は博物館の重要な役割

— 博物館における展示の課題とは何ですか。

日本では博覧会で珍しく奇妙なモノを展示することから始まった博物館ですが、展示すればモノは傷んでしまいます。そこで出てきたのが「保存」という考え方です。博物館にとっては「展示」と「保存」は相反する重要な課題なのです。正倉院が良い例で、巻子や冊子（正倉院の場合は仏教の経典など）は1日1万人もの人が見るものではなく、限定された空間で、プライベートに鑑賞するものでした。そのため、正倉院は保存（収蔵）に特化されています。しかし、博物館はそうはいきません。モノは振動、空気汚染、温湿度の変化、虫害、有害な紫外線・赤外線、強すぎる照明など、さまざまな刺激で傷んでしまいます。博物館・美術館にはこれを少しでも遅らせようと努力する保存修復研究の専門家、コンサーバターがいます。「展示」と「保存」を両立していくには、キュレーターとデザイナーそして美術作品などの保存・修復担当専門職員が足並みを揃えていかないと難しいのです。



博物館の展示照明は照明技術の進化の歴史

— 「展示」と「保存」を両立するには何が必要でしょうか。

展示物の価値観と世界観を分かりやすく見せるキーとなるのが照明です。本来、自然光で見るのが一番自然なのですが、紫外線・赤外線や照度が強く、展示物を保存する視点からは、自然光は選択できません。そうすると人工の照明になりますが、電気がまだない時代に、太陽光や月明かりや火を使って見ていた時代のモノを、人工の光で正しさと美しさを追求するには、照明の技術開発と実用化のスピードに期待するしかありません。博物館の展示照明の歴史は、照明技術の進歩と並行していると言ってよいでしょう。僕が博物館で展示デザイナーとしてやってきたのは大きく二つ。ガラスの性能を上げること、照明器具の眩しさをカットすることです。照明では、不快グレアを与えないように光源が目に入らない位置に照明器具を設置し、ルーバで光を制御しました。また、光ファイバーを用いた照明システムも採用しました。これは光源から光ファイバーを引いて光を導き、展示ケース内に小さな点光源を設ける照明システムです。これなら光を絞って展示を照明演出できるだけでなく、ケース外に光源（熱源にもなる）を設置できるので展示品に熱を与えることなく、紫外線や赤外線も抑えられるので保存性に優れています。展示ケース照明では長い間、美術・博物館用蛍光灯（紫外線吸収膜付）が用いられてきました。しかしこれは赤外線・紫外線カットフィルムを装着しており、演色性能を高めるために照度は抑えられています。このため、博物館・美術館では「暗い」という苦情が多いのです。しかし、明るさを高めることはできます。このため、東京国立博物館本館では間接照明を用いて天井面を明るく見せるなどの工夫もしています。

次世代照明の基準を示す試み

— 博物館展示の鍵となる照明には何が求められていくのでしょうか。

2008〜9年に東洋館の耐震改修工事にともなう展示リニューアルを検討した際、僕が手がけた実施設計の入札仕様書では蛍光灯とハロゲンランプが中心でした。当時のLEDは性能的にまったく使えるものではなかったのです。そこから東洋館がリニューアルオープンした2013年11月までの間、基本設計から実施設計、施工入札までの間にLEDのコストが急激に下がり、性能も上がってきました。そこで、実験という意味も含めて東洋館で初めてLEDを採用したのです。今となっては、気がついたらオフィスも廊下も、私たちの周りのあかりはLEDになっています。ですから、LEDは違和感のない光になったと思います。しかし、博物館という場所で光にこだわって見た場合、違いを感じないでしょうか。音楽がレコードからCDになり、ダウンロード・データになってしまいましたが、なぜかレコードの良さを感じるように。LEDは、暗くしても対象が見えすぎてしまいます。実際に、ある美術館で刀剣の展覧会を開催したところ、国宝や重要文化財の刀剣を並べているのに、すべてが家庭用包丁のように見えてしまいました。違和感を覚える原因の一つは、点光源の集まりになっているので、その分だけ眩しくなるためかもしれません。しかし、それだけではないような気もするのです。また、LEDは波長をさわるので、「これまで見えていなかった青が見えてくる」といった、特性のある光を作り出すことが可能です。しかしこれは本物を見せることにはつながりません。博物館で求められているのは本物をいかに見せるかということです。僕が委員を務めている照明学会の「美術館・博物館の次世代照明基準に関する調査委員会」から、近く報告書がまとまります。そこでは美術館・博物館に求められる照明の要件や性能基準、具体的指針などが提示される予定です。これにより、日本の美術館・博物館用における次世代照明の基準が示されることになると思います。

ミュージアムに行こう

— お話を伺っていると、博物館に行きたくなりました。

東京国立博物館のあるべき姿は静かな空間です。仕事に疲れて訪れるとほっとする空間を造っておかなくてはいけないと考えています。この博物館の凄いところは、ここに来れば日本の歴史を考古遺物や美術・工芸品、歴史資料などでたどれることです。縄文時代から江戸時代まで、そして昭和・平成まで、本館と平成館 考古展示室でたどることができます。東洋館ではエジプトからシルクロードを経て、中国・東南アジア・朝鮮半島まで、これだけの展示品があるのは、アジアではここだけです。特別展が開催されていなくても、総合文化展で本物にふれることができるようにデザインを凝らしています。ぜひ、時間を見つけてお運びください。

— ありがとうございました。